

学校を変える “特別支援校内研修のシステム”

1 最初の提案が全て

学校を巻き込んだ取り組みを行うには、年度当初の提案をどうするか、最も大きなポイントとなる。

私の研修を通じた学校改革も、全てはこの最初の提案からスタートした。

コーディネーターに指名されたのは四月一日。一〇〇人の大規模校であるが、それまでは何の情報もなかった。その日、教務主任に次のように言われた。

小野先生、前の担当が出した文書を見て、もし変更があれば、明日までに修正して出してください。

猶予は一日。しかも、年度末の教育課程の編成で決定済の文書である。大枠は変えられない。そこで、私はコーディネーターの「仕事」と「権限」を明確に整理した。

2 なくてはならない一文字

取り組みの柱として、次の文を載せた。

①特別支援教育だより等による有益情報の発信

この中に、極めて大切な一文字がある。それが何か分かるだろうか？

それは、「等」の一文字である。これがあるのとないのとでは、全く変わってくる。

学校全体を動かそうと思えば、このような一文字にまでこだわらなければ無理だ。

「等」があることによって、私は、堂々と「雑誌や本の紹介」「論文のコピー」「教材・教具」「指導演法」などの紹介ができるようになった。

そのような取り組みの一つとして、「発達障がい児本人の訴え」(東京教育技術研究所)を

紹介・回覧し、合計三十セットの申込みを受けることができた。これが、何もなかったところで同じことをしていたら、反感を持った人もいられるかもしれない。

私は堂々と公的な中で言い、しかも多くの人に感謝された。最初の提案のたった一文字が全てを決定していたのである。

3 研修はミニ研修で行う

取り組みのもう一つの柱として、次の文も載せた。

②職員専門性を高める研修等の積極的な開催

全体の研修計画では、特別支援の研修は、夏休みに一回のみ。これでは、何も変わらない。そこで、三十分程度のミニ研修を毎月行うことにした。計画がないのだから、自主参加の形をとった。これも、最初の提案があるから可能となった。

(※デジタル・トークラインに「特別支援教育 全体計画」の資料掲載)

最初の提案が骨格を決める

岡山県岡山市立荻子山小学校 T.O.S.S 岡山サークル M.A.K

小野 隆行

特別支援教育における 教師の心得 12

四月の出会いで発達凸凹のある子供たちをアセスメントする

ハイタッチアセスメントで簡単に子供の特性をつかむ。

長野県上田市立中塩田小学校

小嶋 悠紀

四月は発達障害を持つ子供にとって不安感が大きい季節である。先生が変わる、学年が変わる、教室が変わる、げた箱が変わる。特にASD(自閉症スペクトラム)傾向の子供たちは変化に弱い。

発達障害を持つ子供たちと一年間安定した形で過ごすには、できるだけ早く「信頼関係」を構築することが重要である。しかし、出会った当初から一人一人の特性を見分けることはなかなか難しい。

私は四月当初に、普通学級のときも、特別支援学級のときも、行う簡単なアセスメントがある。それが「ハイタッチアセスメント」である。これはとても簡単で、発達凸凹のある子供たちの理解に役に立つ。やり方は簡単である。

普通学級担任ならば、「さようなら」をした後に一人一人とただハイタッチをするだけでいい。特別支援学級ならば、廊下ですれ違った子供とハイタッチをする。その時に、ハイタッチをしていく「強さ」をしっかりと観察しておく。

大まかに次の二つに分類ができる。

①大きな強さでバチーン！とタッチする子供

このような子供は、「強い刺激」を欲していることが多い。それくらいの強さでタッチしないと、満足できないタイプの子供たちである。よ

供たちである。

騒いだり、立ち歩いたり、時には奇声などをあげることで、常に「刺激」を求めるタイプの子供たちである。また攻撃性も強く出る可能性もある。出会った当初の担任に、それだけの強さでタッチできるのだから、アドバロンもかなりの数をあげるだろうと予想もできる。さらに、「その強さでは、先生も痛いだろうな」と相手の気持ちを考える力も弱いので、空気が読めなかったりなど、対人関係も気を付けて見ていくことが必要となるだろう。

② 恐る恐る弱くタッチをする子供

次は逆のパターンである。よ

り「弱い刺激」を好むタイプの子供たちである。

強い刺激に弱いので、「大きな音」や「たくさんの人」など強い刺激の環境でどのような表情をしているかなどを、具体的に観察する必要がある。

このような子供は「対人関係」に「不安」を抱えているケースがほとんどだ。後の、不登校傾向などにつながることも考えられるので、集団活動や対人関係などで配慮する必要もあるだろう。何回かハイタッチをしていき、表情が和らぎ、タッチが強くなってきたら関係ができてきている証拠である。その日数を記録しておくことで、様々な人や環境に慣れるまでの一つの目安にすることもできる。

ハイタッチだけでも、このようなアセスメントができる。ぜひ四月に活用してほしい。

※個人の状態像を理解し、必要な支援を考えたり、将来の行動を予測したり、支援の成果を調べることに

